説教要旨『良い贈り物が来る』

ヤコブの手紙　１章９～１８節

「雪国での生活は表面的にはデメリットばかりだ。雪が降らない地域ではしなくてもいい作業を無賃労働で、長時間かけて、命の危険も伴いつつ行う。…にもかかわらず雪国に住む素晴らしさは、厳冬を超えてやってきた春の美しさに、人知をはるかに超えたものを感じ、生きていること自体に感動できることだ」。豪雪地帯、新潟県十日町市で暮らしている方の言葉です。「人知をはるかに超えたものを感じる」…このような感覚は、逆に言えば、「人知が限りあるものである」ことを肌で感じるところから生まれているものでもあるでしょう。掘っても掘っても容赦なく降り続ける雪。そうかと思えば、それらの大雪をいとも簡単に溶かし始めてしまう春が訪れる。「人知限りあるもの」を思い知らされる現実のなかで、しかし、「人知をはるかに超えたもの」への畏れと美しさを知ることが出来る、そんな感動的な世界が開かれていることを教えて頂いているように思います。

ヤコブの手紙は、「試練を耐え忍ぶ人は幸いです」と語りかけています。ここで言われる「試練」とは、「信仰（神への信頼）が試される」ことを意味します。「神などあるものか！」と思わず叫び疑いたくなるような時がそれかもしれません。そして、そのような「試練」の時は、同時に、「誘惑」の時ともなります。神への信頼が揺らぐなかで、「人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥」り、その「罪（的外れな生き方）が熟して死を生」んでいくのだと聖書は教えます。神という目に見えない存在への信頼が揺らぐ時、人が拠り所として鞍替えするのは、目に見えて現実の生活を支えてくれる「富」でありましょう。しかしその最も確かな支えと思える「富」でさえ、やがて、ある日突然、「草花のように滅び去り…その美しさは失せてしまい…人生の半ばで消えうせ」てしまう現実を聖書は見据えています。とは言え、そのようにして「富んでいる者は、自分が低くされることを誇りに思いなさい」とも語られます。そうして「人知限りあるもの」を思い知らされる現実のなかで初めて、何が人間にとっての本当の拠り所であるのかに気づくことができるからでありましょう。

自分の知恵や力や富が何の役にも立たず、人生に絶望してしまうような「試練」と「誘惑」の時に、人は思い違いをしてしまうのかもしれません。幸せや喜びは、全て自分の手にかかっているのだと。目に見える拠り所が次々に過ぎ去っていく現実のなかで、「神などあるものか！」と思わず叫び疑いたくなる私達に、ヤコブの手紙は語りかけています。「わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父（神）から来るのです」。

（文責：望月達朗牧師）